

+1(プラスワン)



「十六夜の夢うつし」

牧師 横山順一

先月某日の夕刊にB、z(ビーズ)が、故郷・津山で凱旋コンサートを開くとの結構大きな囲み記事が掲載された。

ロックバンドB、zのボーカル稲葉浩志さんこそは、私の出身校でもある津山高校で、恐らく史上最も有名な卒業生だ(あくまでも卒業生という身内にとつて)。

「津山朝日新聞」という小さな新聞からもう少し前に、凱旋コンサートの情報を得ていた。

全国紙にまで掲載されるとは、少々驚いたが、たちまち身びいきの小さな喜びに包まれた。

母校は、九月に「十六夜(いざよい)祭」なる文化祭を行う。地方高ではあるが、一応進学校なので、早めに行事を終えて後は大学受験へ備えるためだ。

体育会系でもなく、さりとして文科系でもない、どっちつかずの私は、更に、「受験のための勉強に何の意味があるか」などと屁理屈をこねながら、バンドを組んだ。要

は逃げであり、暇つぶしだった。

似たような境遇(全員、親が教員)のK君とT君の三人で、その名も「ひやきおーがんず」を結成。

誰もボーカルを取れないし、三人ともギターで、仕方なく私がベースに回り、作詞作曲の能力もなし、結局有名ソングをなぞるだけのコミックバンドだった。赤ちゃんの夜泣きのようなものというこ

とでバンド名と相成った。四十数年前の当時、人口七万ほどの津山市に音楽大学があつて意外に音楽の町だった。フォークソングから次第に流行つて来た素人バンドを集めた「津山ファンティッククラブ」が出来た。

ファンティッククラブのコンサート会場は、津山文化センターで、それに出演するのが夢とされた。

学校の音楽室でだらだら好きに集まっていた程度の「ひやきおーがんず」だったから、文化センターのステージに立つことはなく、唯一、十六夜祭に出ただけで終わった。

たいそう勉強もしなかったのに、T君(横浜国立大)もK君(千葉大)も、それぞれ教員となった。

高校卒業後、一度だけT君と東京で会ったが、「お前が牧師とは、世も末じゃ」と笑われた。そつくりセリフを返したかった。K君が地元の某学校の教頭になったと数年前に聞いた。

稲葉君(五年後輩やし!)は、やっぱり十六夜祭で、誘われてバンドに入った。誘った友人は、同じく地元で某学校の教頭先生になっている。

練習のし過ぎで声が枯れて、本番で実力を出すことができなかつた悔しさから、横浜国立大に進学してB、zを結成したという。

燃え尽きるかのような青春もあれば、わずかに燃えもしない青春もある。全部神さまの時間だ。

稲葉君もファンティッククラブで文化センターのステージに立ちたかったらしい。そしてついに七月二十二日、実現した。確かに凱旋だ。

実は文化センターには、私はジュニアオーケストラの定期演奏会で小学生の頃から毎年出演していた。それが稲葉君への密かな自慢(笑)。ファンティックの「狂気」という意味をだいたい後から知った。